

企業成長の過程 — 企業家の人脈と成長を中心に —

長崎大学大学院経済学研究科

田中 史王

【要約】

本論文は、筆者が日々の経営実務において「経営者の人間性（企業家資質）」の重要性を実感したことを動機として、明治・大正期の箕面有馬電気軌道株式会社（現 阪急電鉄）と創業者小林一三に関する分析及び考察を通じて、その重要性を論証することを目指すものである。具体的には、同社の企業成長・発展を形成した多角的事業とそれを主導した小林の企業家活動、その活動の内側にある企業家資質の成熟・発達、企業家活動や企業家資質に作用した企業家人脈について考察を行い、その関係を明らかにする。

まず序章では、上記の研究動機を提示した上で、本研究における問題の所在を明示している。具体的には、伝統的又は近年の経済学的アプローチによる説明の限界性、一部の歴史家による分析に散見される小林一三への過度な英雄視観による考察といった問題点（批判的視座）を挙げている。そして、それらを踏まえて本研究の目的、研究方法を提示している。以下、各章の要約を述べる。

第1章では、最初に本論文の分析枠組みの検討を行った。具体的には Homans による集団行動理論を手がかりにして、本研究の鍵概念となる「企業家活動」「企業家（企業家資質）」「企業家人脈」とその概念間の関係性で構成される分析枠組みを構築し、そこに「相互作用」「変容」といった動的な視点を加えた分析枠組みを設定している。

第2章では、箕有電軌の多角的事業の分析・検討を通じて、事業に対する箕有電軌及び小林の姿勢が明らかに異なる2つの時期が存在することを抽出した。ひとつは、「大正初期までの【模索的・挑戦的な展開】」であり、もうひとつは「大正後期以降の【実験/研究的・慎重的な展開】」であった。そして、それを主導した小林の事業への姿勢は、前者に対して【(先駆企業の存在) → ①「観察 → 模倣・追従」 → ②実行】、後者に対して【(先駆企業の存在) → ④「観察 → 仮説・実験 (→ 再構築)」 → ⑤ 実行】という一連の活動が明らかになっている。

第3章では、小林と交流のあった中上川彦次郎と岩下清周を中心に形成された人脈について整理・分析を行い、それぞれの企業家人脈が小林の企業家活動や企業家資質の変容に大きく作用していることを明らかにしている。具体的には、企業家人脈内の企業家たちによって事業機会やその支援の提供、あるいは小林の人生観（企業家資質）を変容させる転機などの提供を通じて小林の企業家活動に影響を与えていたことを明らかにしている。

第4章では、筆者の実務事例の考察を通じて本研究の分析枠組みの有用性及び枠組みを用いた研究手法の検証可能性の論証を試みている。具体的には、筆者の企業家活動、企業家人脈及び支援、筆者の企業家（経営者）としての資質（の成熟）の関係について本研究の分析枠組みを用いて説明可能であることによって論証している。

終章では、考察結果を総括し、本研究の意義・貢献、今後の課題を提示している。

Appendix では、箕有電軌と同時代かつ近畿圏で企業成長・発展を遂げた競合他社に関して、マクロ経済環境の影響や各社の企業成長・発展の経緯や特徴を整理している。これにより、各社の企業成長・発展はマクロ経済環境の影響だけではなく独自の成長・発展の契機を有することを示している。

以上により、本論文では、従来のアプローチでは一面的にしか説明されてこなかった箕面有馬電気軌道の多角的事業の展開に事業に対する小林の姿勢（企業家活動）が明らかに異なる2つの時期が存在していること、そして、その企業家活動の内側にあった小林の企業家資質の変容、さらには小林に影響を与えた企業家人脈について、ひとつの分析枠組みの中で捉え、その一連のメカニズムについて整合的に説明を与えている。